

## 《東南アジア》10月の犯罪・治安関連事案から

### 《カンボジア》

#### シエムリアップのナイトクラブで発砲騒ぎ

10月11日夜、アンコール遺跡群の観光拠点、シエムリアップの市街地にあるナイトクラブ「ゾーンワン・クラブ」で、「カンボジア・テレビジョン・ネットワーク(CTN)」のキャスター、オン・ラタ(Oeung Ratha)と人気歌手のテット・ヴィチェカ(Teth Vicheka)が泥酔した勢いからクラブの警備員に難癖をつけた上に、拳銃を取り出して6発を乱射した。

けが人は出なかったものの、警備員はこの2人の“セレブ”の暴力団まがいの態度に激しく憤慨しており、2人を警察に告発するとともに慰謝料も要求している。

シエムリアップ市警察の調べによると、2人は泥酔していたにも拘らず、同クラブの前に車を乗りつけ、警備員にゲートを開けるよう要求した。その際、警備員が「なぜそんな危険な運転をしているのか」などと問い質してゲートをすぐに開けなかったため、2人が腹を立てて警備員と激しい口論になった。

口論で激昂した2人はそれぞれ拳銃を取り出し、警備員に一旦銃口を付き付けた後に空中に向かって各々3発ずつ発砲したという。

警備員はその直後に、2人をシエムリアップ市警察に告発するとともに、2人に慰謝料5,000ドルの支払いを求めた。

同市警のホーン・チェンダリット(Hoeung Chendarith)本部長は、この事案をシエムリアップ州警察本部に送付し、州警察本部長の采配で捜査を進める方針を示した。

また、同市警察の調べによると、事件の発生現場には、「クレム(Krem)」の芸名で知られるコメディアン、アウ・ブンナラット(Ou Bunnarath)もいたことが判明した。

アウは、地元メディアの取材に対して「発砲を目撃したのは確かだが、私自身は拳銃を所持していなかったし事件と直接の関係はない。ただ、2人が警備員

に銃口を突き付けたというのは事実と異なっている」と話した。

告発された2人は、取材に対してコメントを拒否している。

【視点・背景】司法は機能せず

\*カンボジアでは、政府高官やその身内がディスコやナイトクラブ等で傍若無人に振舞い、暴力沙汰を起こすことも多いが、同国の司法は、そうした“セレブ”の取締りには極めて消極的であり、被害者が泣き寝入りする場合も少なくない。

\*2003年10月27日には、フン・セン首相の甥が市内で車を運転中に他の車と交通事故を起こして相手側と口論になり、逆上して車のトランクから取り出した自動小銃を乱射して通行人2人を射殺、数人に重軽傷を負わせたが、この甥には懲役わずか3年(刑期の半分は執行猶予扱い)の判決が下されている。

### 《インドネシア》

#### 中央ジャカルタで学生グループの乱闘騒ぎ

10月14日午後3時30分ごろ、中央ジャカルタのサレンバ地区で「インドネシア・クリステン(キリスト教)大学(UKI)」の学生グループと「ブンカルノ大学(UBK)」の学生グループが乱闘する騒ぎがあった。

両グループは、互いに石や飲料水のボトルなどを投げ合ったため、近隣の「チプト・マンガクスモ総合病院」や「インドネシア・プルサダ(祖国)大学(YAI)」の外側に駐車してあった車2台の窓ガラスが割られるなどの被害が出た。

間もなく警官隊が乱闘現場に駆けつけ、空中に向けて威嚇射撃を行うなどして、学生らを一時的に各々が所属する大学のキャンパス内に封じ込める措置をとった。乱闘は10分以内に終息し、双方のグループに目立ったけが人は出なかった。

乱闘の原因ははっきりしないが、何らかの理由でUKIの学生数十人がUBKの学生1人を追い回したことが発端で、この学生の救援に駆けつけたUBKの学生にサ

レンバ地区住民も加勢し、UKIの学生グループとの乱闘に発展したという。

ドゥマ・バルン(Duma Barung)UKI講師は、地元メディアの取材に答えて、乱闘を起こした学生らを厳しく非難するとともに、「最も遺憾に思うのは、こうした事件には明確な原因などないことである」と語った。

【視点・背景】他のキャンパスでも発生  
\*UKI、UBK、YAIの3校は、互いにキャンパスが近接していることもあり、学生達の間でしばしば、喧嘩沙汰が起きている。8月には、UKIとYAIの学生グループの間でも同様の乱闘騒ぎを発生した。

\*こうした騒ぎは、ジャカルタをはじめとする主要都市の他のキャンパスの周辺でも発生しがちなので、大学の近辺を通る際は一定の注意が必要である。

### 《インドネシア》

#### 中央ジャカルタで邦人企業の入居ビルに爆弾予告

10月16日午前6時45分ごろ、中央ジャカルタ・スディルマン通り沿いのオフィスビル「ウィスマ・キョウエイ・プリンス(Wisma Kyoei Prince)」に男の声で「ビルの内部に爆弾を仕掛けた」との予告電話があった。

電話を受けた同ビルの警備員が直ちに警察へ通報し、爆発物処理班が26階建ての同ビル内をくまなく捜索したが、爆弾らしき不審物は発見されなかった。

同ビルには、大手を含む邦人企業も多数入居しており、入居企業の社員らは警察が捜索を実施中の3時間ほど屋外への避難や待機を余儀なくされた。警察は、午前11時付けで「偽の爆弾予告電話だった」と断定し、避難命令を解除した。

スディルマン通りでは、2003年10月7日と8日にも今回の「ウィスマ・キョウエイ・プリンス」、および同じく邦人企業が入居するオフィスビル「ウィスマ46」で爆弾予告騒ぎが起きたことがある。

【視点・背景】爆弾脅迫が再び増加  
\*爆弾予告・脅迫は重大犯罪である。警察

の安全確認作業の労力や、従業員の一時的な避難など対象施設に与える経済的損失に加えて、首都圏の市民に少なからぬ不安感を与えるという点でも、社会に与える影響が大きいことはいまでもない。

\*ジャカルタでは、2002年10月の「バリ島ディスコ爆破事件」以来、この種の爆弾脅迫電話が多発してきた。しかし、05年10月の「バリ島連続自爆テロ」(邦人1人を含む20人死亡)を最後にインドネシアで大規模テロが発生していないこともあって、最近ではそうした脅迫電話も件数が少なくなっていた。

\*今年中に上述した「バリ島ディスコ爆破事件」の3死刑囚に対する死刑が執行される予定であり、それに対するイスラム過激派の報復テロが危惧されていることから、そうした不安感に乗じた爆弾脅迫電話が今後も相次ぐ可能性がある。

## 《インドネシア》 スカルノ・ハッタ国際空港で 違法タクシー運転手摘発作戦

首都ジャカルタの空の玄関であるスカルノ・ハッタ国際空港を運営・管理する「アンカサ・プラⅡ」社は10月6日、同空港内で営業行為をしている違法タクシー運転手、“半合法運転手”、その他の違法運転手などを対象にした取締り作戦を実施すると発表した。

同社のヘリー・バクティ(Herry Bhakti)空港長によると、違法タクシーは、空港当局が乗り入れを許可したことを示すステッカーをフロントガラスに貼っていない。

また、“半合法運転手”とは、「アンカサ・プラⅡ」社による所定の訓練を受けたことがあるが修了証を取得できなかったタクシー運転手を指す。彼らはモグリ(モグリ)のタクシー業者として空港に出入りしているという。

「その他の違法運転手」は、以前に同社が空港での活動を許可したものの、のちに許可を取り消した一般企業が所持するミニバンなどの運転手である。

空港当局が調査した最新のデータでは、同空港には違法タクシーだけでも毎日625台が客引き行為を行っている。

同社は、取締り作戦によってこれらの違法タクシー業者の中から悪質な約300台を立入禁止処分にし、残りの約300台についてはレンタカーとしての営業を認

める方針を示した。ただ、レンタカーは同社の厳しい管理と規定の下に置かれるという。

ヘリー氏によると、違法タクシーには、空港周辺の比較的裕福な住民や、同空港の元幹部職員が所有し営業しているものが多い。

〔視点・対策〕市内では悪徳運転手も横行  
\*ジャカルタで営業しているタクシー運転手の中には、客に対して強盗、誘拐、強姦などを働く犯罪者も存在する。特に、南ジャカルタの「ブロックM」で客待ちをしているタクシーは危険度が高いとされている。

\*一方、空港で客待ちをしているタクシーは比較的安全であるが、中にはわざと遠回りをしたり、メーターに細工をすることで法外な運賃を要求する悪徳運転手も存在する。

\*ジャカルタでは「ブルーバード・グループ」系列のタクシーなら安全性が高いとされている。しかし、同グループのタクシー運転手の中にも、現地事情に不慣れな旅行者相手に不正を働こうとする者も存在するので、ジャカルタから市内へ向かう際は、現地サイドに出迎えを依頼するか、ホテル・タクシーを利用した方が無難である。

## 《インドネシア》 バアシル師率いる集団が警備員と小競り合い

10月6日午前10時30分ごろ、東南アジアの広域テロ組織「ジュマー・イスラミア(JI)」の“精神的指導者”とされるイスラム導師、アブバカル・バアシル師とその信奉者の一団が、中ジャワ州チラチャップのウィジャヤプラ埠頭に姿を現し、沖合いにあるカンバンガン島に渡ろうとしたため、それを阻止しようとする同埠頭の警備員達との間で小競り合いが発生した。

同島のバトゥ重罪刑務所には、2002年10月の「バリ島ディスコ爆破事件」(邦人2人を含む202人死亡)で中心的役割を果たしたJIメンバーのアムロジ、アリ・グフロン(別名ムクラス)、イマム・サムドラの3死刑囚が収監されている。

バアシル師らは、この3人をはじめとするテロリストの受刑者らとの面会を要求したが、警備員側はバアシルらが面会に必要な当局からの書類を所持していないことを理由に、渡し船の利用を拒否し

たため、トラブルになった。

警備員側の説明によると、死刑囚との面会に関しては、同州の法務・人権局とチラチャップにある同局事務所の双方から許可証を取得する必要がある。

バアシル師らと警備員達はしばらくの間、睨みあいが続けたが、最終的に同師が「当局の定めた法的手続きに従う」と折れたため、激しい衝突には至らなかった。その後、同師らの一団は、死刑囚以外のテロリスト達との面会を許可されることになったため、午後0時30分頃に同島への入域が認められた。

〔視点・背景〕JIの“精神的指導者”  
\*バアシル師自身は、バリ島事件の直後にテロ容疑でインドネシア当局に逮捕され、2005年3月に禁錮2年6月の有罪判決を受けて服役したが、同年のインドネシア独立記念日の恩赦により刑期を短縮されて06年6月に出所した。



アブバカル・バアシル師

\*同師は、テロ容疑を否認しているが、JIが彼を“精神的指導者”として崇拝しているのは周知の事実である。同師も、JIのテロ実行犯らを「米国とその同盟国の権益と闘おうとした英雄」として評価する趣旨の発言を行っており、そうした発言は急進的なイスラム教徒の若者に大きな影響を与え、JIのリクルート活動に貢献している。

\*インドネシアの司法当局は、アムロジら3人の「バリ島事件」死刑囚に対する死刑の執行を、10月初めのイードル・フィートリ(イスラム教の断食明け)後に実施するとしてきたが、安全上の理由などからその正確な日時は予告されておらず、執行後に発表されるとみられる(本稿執筆時点〔10月22日〕では死刑は未だ執行されていない)。

## 《フィリピン》 バイク使用犯罪の多発地域は セブ島周辺

フィリピン国家警察が最近公表した統計によると、バイクを使用した犯罪(ひったくりなど)の発生件数は、セブ島を中心とする第7管区警察局(中部ビサヤ地方)

が全国で最も多く、今年1月から8月までに205件に上った。

これを受けて、同警察局本部(セブ市)は10月中旬、同本部刑事部のドルシロ・ボロド(Drusillo Bolodo)次長を隊長に、バイク関連犯罪を専門に取締まる特別部隊「タスクフォース・モーターサイクル」を新設した。同部隊は、セブ市街地とその近郊地域を含む都市圏の要所に、バイク運転者を対象とする検問所を設置して、犯罪者の割り出しなどを行う方針である。

ボロド隊長によると、バイク関連犯罪の取締りには警察と陸運局の連携・調整が不可欠であり、特に全てのバイクに対して規格の統一されたナンバープレートを手体の前後に取り付けるように徹底させることが重要である。

また、同隊長は「複数のバイクが縦列を組んで走行している場合は特に厳しい点検の対象になる」として、運転者に注意を呼びかけた。

一方、セブ市警察部のパトロシニオ・コメンダドール(Patrocinio Comendador)本部長は「同市内に限れば、バイク使用犯罪の発生件数は今年1～8月の期間で147件であり、この数値は他の地方都市と比べても決して多くない」と主張している。

同本部長は「こうした統計や見解をまとめた報告書を10月13日に国家警察本部に送付した」とした上で「セブ市がバイク使用犯罪の多発地域であるかのような誤解を払拭するつもりだ」と強調した。

【視点・対策】2人乗りバイクは要警戒  
\*バイク使用犯罪の大半はひったくりであるが、殺し屋による「ヒット・アンド・アウェー」型の殺人にもバイクが使われることが多い。

\*バイク使用犯罪では大抵の場合、運転役と、ひったくりや銃撃を実行する役が2人乗りして犯行に臨むので、2人乗りのバイクが近づいてきたら警戒が必要である。

## 《マレーシア》

### 誘拐事件の人質は87%が救出・解放

マレーシア連邦警察本部(通称「ブキアマン」)は10月16日、「2006年以降に全国で発生した身代金誘拐事件で計55人が人質となったが、そのうち48人(87%)が無事に救出または解放された」と発表し

た。救出または解放されていない7人のうち、5人は犯行グループに殺害され、残りの2人は現在まで安否不明である。

モハメド・バクリ・ジニン(Datuk Mohd Bakri Zinin)犯罪捜査局(CID)局長は「一部の政治家が警察の誘拐事件解決能力を疑問視しているようだが、CIDは特別班を設置して誘拐事件の解決を最優先しており、特に人質の生命を守ることを第一にしてきた」と強調した。

また、同局長は「誘拐被害者の親族らが犯行グループに身代金を支払うことは、類似事件の誘発に繋がるため、警察は一貫して支払いに反対してきた。しかし、身代金を支払うかどうかは最終的に被害者の親族の意思に委ねられるため、警察が事件への対応に苦慮することも多かった」との本音ももらした。

最近の誘拐事件の特徴について、同局長は「犯行グループが警察の急襲に重火器で応戦してくるケースもあり、特別班員の生命が危険に晒されることが少なくない」と語った。

【視点・背景】過激派による誘拐事件  
\*マレーシアで誘拐事件発生の危険性が高い地域に、ボルネオ島北東部に位置するサバ州の東海岸および近海の島嶼部がある。このうち、センボルナの沖合いにあるシパダン島では2000年4月23日、フィリピンのイスラム過激派「アブ・サヤフ(ASG)」によって外国人観光客ら21人が誘拐され、計10億円を超える巨額の身代金が支払われた。

\*サバ州には、「アブ・サヤフ」以外にも、東南アジアの広域テロ組織「ジュマー・イスラミア(JI)」、フィリピンのイスラム過激派「モロ・イスラム解放戦線(MILF)」などのメンバーが潜伏していると見られており、同州の島嶼部以外の地域でも、欧米人を狙ったテロや誘拐事件が発生する可能性が指摘されている。

## 《ミャンマー》 ヤンゴンで相次いで爆弾事件が発生

10月18日午後7時10分ごろ、ヤンゴン北郊のヤンキン(Yankin)地区にある芝地で時限爆弾が爆発したが、人的・物的な被害はなかった。出動した爆発物処理班が付近を捜索したところ、爆発現場から5mほど離れた地点で別の爆弾を発

見、同班員が爆発設定時刻前に時限装置を解除し事なきをえた。

爆発現場は、ポートー(Baukhtaw)鉄道駅通りとモーコーン(Moekaung)通りの交差点付近で、近くには国軍の文書管理施設がある。同施設を威嚇することが目的の爆弾テロだった可能性が高い。

また、翌19日午後5時30分ごろ、ヤンゴン北西郊のシュエピタ(Shwepyitha)地区にある民家の内部で爆弾が爆発し、住人の男1人が即死した。

治安当局が民家内を捜索したところ、電気信管を含む手製爆弾(IED)製造用の部品多数と爆薬を発見・押収した。当局によると、死亡した男は東部(タイ)国境地帯を違法に訪問し、10日ほど前に帰宅したばかりだった。当局は、男はヤンゴンに潜伏していた反政府組織の破壊分子で、製造中のIEDを誤って起爆させてしまったとみている。

当局によると、9月25日にヤンゴン市庁舎付近のバス停留所で発生した爆弾テロ事件(4人負傷)で使用されたIEDと、死亡した男が製造していたIEDの構造が似ていることから、男が同事件に関与していた可能性についても調べている。

【視点・対策】9月以降に多発化傾向  
\*2008年中にヤンゴン管区内で発生した爆弾テロ事件は、本稿執筆時点(10月22日)までで計7件(治安当局が原因を明らかにしていないバス爆発事件を含めると計9件)で、そのうちの4件は9月以降に発生しており多発化する傾向にある。

\*治安当局が9月中旬に入手した情報によると、東部(タイ)国境地帯を拠点にする3つの反政府武装組織の連合は、ヤンゴンで爆弾テロを連続して実行するために破壊分子5人をすでに同市内に潜入させた。その後、テロが多発化している事実はこの情報と符合している。

\*7件のテロは、負傷者が出た2件を含めた3件がヤンゴン中央駅からスーレ・パゴダや市庁舎がある市街地で発生している。他の4件の発生場所は、(上述した「誤爆事件」と見られる1件を除くと)近郊地域の軍政関連施設の近くである。スーレ・パゴダ通り周辺地域に出向く時は、長時間路上を歩かないなど警戒を怠らないことが重要である。

(アジア・リンケージ 勝田 悟)

# 《マレーシア》MCAの新総裁にオン運輸相 ン女性・家族相が党史上初の総裁補に

与党連合・国民戦線(BN)の第二党であるマレーシア華人協会(MCA：下院15議席)では、10月中旬に実施された党役員選挙でオン・ティーキアット運輸相が総裁に初選出されるとともに、副総裁および総裁補(4ポスト)も全員が入れ替わった。華人有権者のBN離れが顕著になる中で、“闘士”タイプのオン新総裁には、BN第一党の統一マレー国民組織(UMNO)とも対等に涉り合える果敢な政治力が期待されている。

MCAは、10月17-19日に同党本部に全国から2,378人の代議員を集めて第55回党大会を開き役員選挙を実施した。役員選挙では、すでに政界引退の意向を表明していたオン・カティン前総裁(前住宅・地方政府相)とチャン・コンチョイ前副総裁(前運輸相)が出馬しなかった関係で、総裁(president)・副総裁(deputy president)・総裁補(vice-presidents)計6ポストの全員が入れ替わることになった。

総裁選では、オン・ティーキアット前総裁補(運輸相)が1,429票を獲得し、917票を獲得した対立候補のチュア・ジュイメン元総裁補(元保健相)を押さえて新総裁に選出された。

## 副総裁はチュア元保健相

また、副総裁選は、盗撮セックスビデオ事件で今年1月に閣僚辞任に追い込まれたチュア・ソイレック元総裁補(元保健相)が、現職の住宅・地方政府相でオン・カティン前総裁の実兄でもあるオン・カチュアン前党書記長を僅差で破って“復権”を果たした。

4ポストある総裁補には、リョウ・ティオンライ前青年部長(保健相)、コン・チョーハ副財務相、タン・コックホン・ジョホール支部筆頭副支部長(同州議会議員)、ン・イェンイェン前女性部長(女性・家族・共同体開発相)が当選した。ン氏はMCA党史上初の女性総裁補となる。

この他、青年部長にはウィー・カション氏、女性部長にはパドウカ・チョー・メイファン氏が無投票当選した。25人が選出された中央執行委員では、現職の再選は11人だけで14人が新顔となった。

BNの中核政党・UMNOでも、アブドゥラ総裁(首相兼国防相)が来年3月に予定される同党役員選挙に出馬せず、同時期

に首相職をナジブ副総裁(副首相兼財務相)に“禅譲”する意向を10月初旬に表明している。MCA指導部の刷新と相まって来年にはBN指導部も新しい陣容になる。

## 華人社会の反UMNO感情

ところで、MCAの役員選挙の前には、オン・カティン氏が総裁として最後の演説を行い、華人社会に広がる反UMNO感情を代弁するかのよう「傲慢かつ民族差別的な政治家の存在」、「非イスラム教徒に対する政府当局の強圧的な対応」、「政治家・官僚に蔓延る職権乱用と汚職」などを厳しく指摘して、同氏としては異例のUMNO批判を展開した。

しかし、前総裁はどちらかといえば知的で線が細く、現職時代はUMNOにも遠慮がちだった感があるのは否めない。それに対して、オン・ティーキアット新総裁は、2000年代前半のMCA内紛で反主流派の“闘士”として知られた行動派であり、党の草の根組織の支持も厚い点で前総裁とは対照的なタイプである。MCA党大会の代議員は、与党第一党に対しても「直裁に物が言える」総裁の誕生を望んだのだといえる。

### 【人物データ・ファイル】

#### ■マレーシア華人協会(MCA)総裁

President, Malaysian Chinese Association  
オン・ティーキアット [翁詩傑]  
Datuk Ong Tee Keat



【公職】運輸相  
【年齢】52歳【生地】クアラルンプール【宗教】仏教【学歴】1981：マラヤ

大学工学部卒【経歴】土木工事会社勤務。華字紙コラムニスト。1986：公共事業相政務秘書官。89：住宅・地方政府相政務秘書官。90：下院議員に初当選(以来、連続当選)。99：副青年スポーツ相。06：副高等教育相。08：[3月19日]運輸相。【党務】1999：MCA青年部長。2005：総裁補。2008：[10月18日]総裁。【家族】チョイ・ヨクチュン(Datin Chooi Yoke Chun)夫人との間に3女。

#### ■マレーシア華人協会(MCA)総裁補

Vice-President  
ン・イェンイェン [黄燕燕]  
Datuk Dr Ng Yen Yen



【公職】女性・家族・共同体開発相  
【年齢】62歳【生地】クランタン州コタバル【宗教】仏教【学歴】マラヤ大学医学部卒(MBBS)。(米)ジョンホプキンス大学で生殖医学学位取得【経歴】医師。1993：上院議員(-96)。99：下院議員に初当選(以来、連続当選)、副文化芸術・観光相。2003：副財務相。08：[3月19日]女性・家族・共同体開発相。【党務】1999：MCA女性部(Wanita)部長。2008：[10月18日]総裁補。【家族】夫君はチン・チースー(Dr Chin Chee Sue)氏。子供：3男。孫1人。

### 【既出データ】

■チュア・ソイレックMCA副総裁(元保健相)(→05/03/15)

(アジア・リンケージ 勝田 悟)